

『慶應マーケティング論究』  
第15巻 (Spring, 2019)

## 食べ放題は食べすぎを引き起こすのか ——自己卑下的帰属傾向を考慮して——

穂苺 華子

既存研究によると、食べ放題方式のレストランでは、食べすぎの責任を自分で負うべきである一方、提供量が固定されたレストランでは、その責任をレストランに負わせるため、前者より後者において食べすぎが生じるという。しかし、自分の失敗の責任を可能であれば他者に負わせようとする「自己奉仕的帰属」傾向とは対照的な、「自己卑下的帰属」傾向を有する消費者も存在する。本論はこうした消費者間差異が食品摂取行動に及ぼす影響を分析する。

### 第1章 はじめに

外食とは、食堂、レストラン、ファーストフード店、喫茶店、居酒屋などの飲食店や事業所給食で提供される食事のことである。外食は、消費者の食品摂取時の選択肢の1つとして広く普及しており、アメリカにおいては、国民の3分の2が外食を2日に1度利用している (United States Department of Agriculture Economic Research Service HP)。また、日本においても、外食を利用する人が多く、特に単身世帯では食料支出のうち37.9%を外食が占めている (cf. 農林水産省 HP)。

外食の提供方式は「食べ放題」方式と「提供量固定」方式の2種類に大別される。食べ放題方式とは、「ビュッフェ式」とも呼ばれ、レストランによって多量の食品が提供されており、消費者の食品摂取量を消費者自身が調節可能であるような提供方式を指す。食べ放題方式のレストランの例として、「しゃぶしゃぶ温野菜」が挙げられる。このレストランにおいては、しゃぶしゃぶをはじめとする全60種類を120分間で自由に食べることができる (cf. しゃぶしゃぶ温野菜 HP)。一方、提供量固定方式とは、レストランによって1人前の提供量が固定されているため、消費者の食品摂取量を消費者自身が調節不可能であるような提供方式を指す。提供量固定方式のレストランの例として、「デニーズ」が挙げられる。このレストランにおいては、各食事メニューを単品で注文する形式が採用されている (cf. デニーズ HP)。

外食は、提供方式を多様化させることによって様々なニーズに対応する一方で、食べすぎを引き起こす。そのため、外食時の食品摂取行動に関する研究は、これまで、如何に食べすぎを引き起こすのかということに関して探究してきた (Guthrie, Lin, and Frazão, 2002)。例えば、Guthrie, *et al.* (2002) は、レストランで提供される食品の一部が、非常に高い脂肪含量を持っているということを見出している。

以上のように、大半の研究は、食べ過ぎを引き起こす要因は、外食時に提供される食品の種類にあると主張してきた。しかし、Hagen, Krishna, and McFerran (2017) は、消費者がレストランのメニューを見ながら食品を選択するという外食特有の食品摂取行動に着目し、食べすぎは食べ放題方式のレストランで

あるか提供量固定方式のレストランであるかに依存すると指摘した。彼らによると、消費者は、食べ放題方式のレストランにおいては、食べすぎの責任を自分で負う一方、提供量固定方式のレストランにおいては、「自己奉仕的帰属」を行うことによって、レストランに食べすぎの責任を負わせるため、前者より後者において食べすぎが生じやすいという。

しかし、Hagen, *et al.* (2017) は、外出時の提供方式に着目し、食べすぎの要因として「自己奉仕的帰属」を見出した点において、外出による不健康の研究の進展に大きく貢献したものの、「自己奉仕的帰属」傾向の消費者のみを仮定しているという問題点を抱えている。「自己奉仕的帰属」傾向の消費者は、自分の成功の責任が自分自身にあると考える一方で、自分の失敗の責任を可能であれば他者に負わせようとするが (Miller and Ross, 1975)、この傾向は、欧米特有の傾向であり、日本をはじめとするアジアでは、「自己奉仕的帰属」傾向とは対照的に、自分の失敗の責任を負う一方で、自分の成功の責任を可能であれば他者に負わせようとする「自己卑下的帰属」傾向を示す消費者もいると主張している研究も存在する (Markus and Kitayama, 1991; 北山・高木・松本, 1995)。外出時の食品摂取行動を探究するに際して、この「自己卑下的帰属」傾向の消費者を無視することはできない。そこで、本論は、消費者を「自己奉仕的帰属」傾向の消費者と「自己卑下的帰属」傾向の消費者の 2 種類に分類し、消費者間差異が外出時の食品摂取行動に及ぼす影響を分析する。

## 第 2 章 既存研究レビュー

### 2-1. 食べすぎに関する研究

人は、食品摂取行動を抑制する意志の欠如により、食べすぎてしまう (Chernev, 2011)。それゆえ、食品業界のマーケターは、どのような要因が顧客の食べすぎに影響を及ぼすのかに関して探究してきた (Chandon and Ordabayeva, 2009; McFerran, Dahl, Fitzsimons, and Morales, 2010; Zlatevska, Dubelaar, and Holden, 2014)。

Chandon and Ordabayeva (2009) は、パッケージサイズの変化が及ぼす視覚的な影響に関して研究を試みた。彼らは、パッケージサイズが部分的に変化する場合と、3 次元的 (高さ、幅、長さ) に変化する場合を比較し、パッケージサイズが 3 次元的に変化する場合の方が、1 次元的に変化する場合に比して、人々はその変化に鈍感になるということを見出した。

McFerran, *et al.* (2010) は、レストランの従業員が消費者の食品接種行動に及ぼす影響を探究した。彼らは、ウェイターの体型に着目したうえで、ウェイターを「太り気味」と「痩せ気味」に分類し、さらに、消費者を「ダイエットに従事している人」と「ダイエットに従事していない人」に分類した。そして、「ダイエットをしている人」は、ウェイターが太り気味である場合に、より多くの食品を摂取し、「ダイエットをしていない人」は、ウェイターが痩せ気味である場合に、より多くの食品を摂取するというところを見出した。

Zlatevska, *et al.* (2014) は、1 人前の食品提供量が食べすぎに与える影響に関して着目した。具体的には、1 人前の食品提供量が食べすぎを引き起こすという負の側面に焦点を絞り、「消費にどれだけ影響を与

えるか」および「その影響に限界はあるのか」の2点に関して研究を行った。その結果、1人前の食品提供量が2倍になると消費が35%増加するが、その消費促進効果には限界があるということが見出された。

以上のように、パッケージサイズ (Chandon and Ordabayeva, 2009)、食事の提供 (McFerran, *et al.*, 2010)、および1人前の食品提供量 (Zlatevska, *et al.*, 2014) といった様々な要因が食べすぎを引き起こすということが見出されてきたわけであるが、Hagen, *et al.* (2017) は、新たに、レストランの提供方式に焦点を絞り、レストランの提供方式が食べすぎに及ぼす影響を探究した。彼らによると、外食の提供方式が食べ放題方式のレストランであるか、提供量固定方式のレストランであるかによって、外食時の食品摂取行動に対する関与の度合いが異なるという。食べ放題方式のレストランにおいては、消費者は食品摂取量を自分で管理するため、外食時の食品摂取行動に対する関与度は高い一方、提供量固定方式のレストランにおいては、消費者の食品摂取量がレストランによって管理されるため、外食時の食品摂取行動に対する関与度は低いという。彼らは、外食時の食品摂取行動に対する関与度が高い場合に比して、低い場合の方が、すなわち、食べ放題方式に比して、提供量固定方式のレストランの方が、不健康な食事を選択する際に、自分の失敗を自分以外の課題や運などの外的要因に帰属させる自己奉仕的帰属を行う。それゆえ、その食事摂取行動の責任を自身ではなく、提供者であるレストランに負わせると主張した。

彼らは、実験において、被験者を提供量固定方式のレストランに行く想定するグループと食べ放題方式のレストランに行く想定するグループの2種類に分類し、それぞれに健康的な場面と不健康な場面を想定したシナリオを読ませた。そして、食事量と、その食事を摂取した後の、食べたことに対する責任感と、自己評価感情を測定した。二元配置分散分析を行った結果、不健康な食事を選択した消費者は、食べ放題方式のレストランの場合に比して、提供量固定方式のレストランの場合の方が、多くの食事量を選択し、また責任感を感じにくく、さらに好意的な自己評価をする、ということが見出された。

## 2-2. 自己奉仕的帰属と自己卑下の帰属

Hagen, *et al.* (2017) が主張する因果関係において重要な役割を担っているのは、自己奉仕的帰属である。自己奉仕的帰属とは、日常生活の中でも仕事・競争・学習といった目標づけられた活動において成功や失敗をした場合に、自尊心を獲得・維持したいという動機によってその原因を推論する帰属プロセスの1つである。

自己奉仕的帰属に関する嚆矢的な研究として、Heider (1958) が挙げられるであろう。彼は、人は成功と失敗の原因には内的要因と外的要因があると素朴に認知していると主張した。彼の言う内的要因とは、例えば努力や意図といった個人の力のことである。他方、外的要因とは、例えば運や課題の困難さといった環境の力のことである。彼は、人は自分が受け入れられるように自尊心を維持または強化したいと考えるため、内的要因と外的要因は目標づけられた活動の結果として歪められるということを見出している。

Miller and Ross (1975) は、Heider (1958) を踏まえて、成功した場合と失敗した場合の帰属プロセスを体系化し、それを「自己奉仕的帰属」と命名した。彼らによると、自己奉仕的帰属傾向の人は、「自己高揚的 (self-enhancing) 帰属傾向」と「自己防衛的 (self-protective) 帰属傾向」の2種類に分類できるという。自己高揚的帰属傾向とは、成功した場合に、自分の成功を努力や意図などの内的要因に帰属させ、自分の

成功の重要性や信頼性を高く評価することを指し、他方の、自己防衛的帰属傾向とは、失敗した場合に、自分の失敗を自分以外の課題や運などの外的要因に帰属させ、自分の失敗の重要性や信頼性を低く評価することを指す。

また、Bradley (1978) は、自己奉仕的帰属の主張を支持する経験的証拠を見出した。彼によると、自己奉仕的帰属傾向の人は、成功した場合には、他者に対する自己の肯定的な公的評価 (public esteem) を獲得しようとして、自身に責任を負わせる一方で、失敗した場合には、他者に対する自己の肯定的な公的評価を維持・防衛しようとして、自身に責任を負わせることを拒否するという。

日本をはじめとしたアジアの文化においては、アメリカをはじめとした西洋の文化にみられる自己奉仕的帰属とは異なる自己卑下的帰属がみられると主張する研究が登場している (Markus and Kitayama, 1991; 北山・他, 1995; 村本・山口, 1997)。自己卑下的帰属とは、失敗した場合、自分の失敗を能力や努力などの内的要因に帰属し、成功した場合、自分の成功を自分以外の課題や運などの外的要因に帰属させる帰属プロセスである (村本・山口, 1997)。

Markus and Kitayama (1991) は、日本をはじめとしたアジアの文化における成功した場合の帰属プロセスの説明を試みた。彼らによると、日本をはじめとしたアジアの人々は、相互依存的自己観を持ち、他者に焦点化された情動 (other-focused emotions) によって動機づけられやすく、自分と他者が互いの自尊心を高揚し合う関係を重視する。そして、それゆえに、成功した場合に、成功を自分以外の周囲にいる他者といった外的要因に帰属させるという。

北山・他 (1995) は、日本文化における失敗した場合の帰属プロセスの説明を試みた。彼らによると、日本においては、自己批判的に自身の欠点・短所・問題などを見つけ出し、絶え間ない努力により、これを矯正するという自己向上のプロセスが文化的に広く共有されているという。そして、それゆえに彼らは、日本人は、失敗した場合に、失敗を自分の課題、短所といった内的要因に帰属させるということを見出した。

村本・山口 (1997) は、Markus and Kitayama (1991) や北山・他 (1995) を踏まえて、日本における失敗と成功の帰属プロセスを体系化し、自己卑下的帰属と命名した。失敗した場合に、自己卑下的帰属傾向の人は、自分の失敗を能力などの内的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、自己批判的に自分の欠点・短所・問題などを見つけ出し、努力することによって改善を試みるという。一方、成功した場合には、自己卑下的帰属傾向の人は、自分以外の調子や運などの外的要因に帰属させることによって、自分の成功に関して謙遜するという。

### 第3章 仮説の提唱

前章において概観したとおり、Hagen, *et al.* (2017) は、「自己奉仕的帰属」という帰属プロセスを利用して、レストランの提供方式が食べすぎに及ぼす影響を探究した点で、食べすぎの研究の進展に大きく貢献したであろう。しかし、先述のとおり、彼らは、帰属プロセスにおいて「自己奉仕的帰属」傾向と対称をなす「自己卑下的帰属」傾向を考慮していない。そこで、本論は、消費者を自己奉仕的帰属傾向の消費者と自己卑下的帰属傾向の消費者の2種類に分類した上で、不健康な食事を選択する際の外出時の異なる食品

摂取行動を分析したい。

自己奉仕的帰属傾向の消費者は、成功した場合には、自分の成功を努力や意図などの内的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、他者に対する自己の肯定的な公的評価を獲得しようとして、自身に責任を負わせる。一方、こうした傾向の消費者は、失敗した場合には、自分の失敗を自分以外の課題や運などの外的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、他者に対する自己の肯定的な公的評価を維持・防衛しようとして、自身に責任を負わせることを拒否する (Miller and Ross, 1975; Bradley, 1978)。こうした傾向の消費者は、Hagen, *et al.*が主張したように、外食時の食品摂取行動に対する関与度が高い場合に比して、低い場合の方が、すなわち、食べ放題方式に比して、提供量固定方式のレストランの方が、消費者の食品摂取量がレストランによって管理されるため、不健康な食事を選択する際に、自分の失敗を自分以外の課題や運などの外的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、食べすぎの責任を自身ではなく、提供者であるレストランに負わせるであろう。それゆえ、こうした傾向の消費者は、前者より後者において、食べすぎが生じると考えられる。

自己卑下的帰属傾向の消費者は、成功した場合には、自分の成功を自分以外の調子や運などの外的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、自分の成功に関して謙遜する (村本・山口, 1997)。一方、こうした傾向の消費者は、失敗した場合には、自分の失敗を能力などの内的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、自己批判的に自分の欠点・短所・問題などを見つけ出し、努力することによって、自分の失敗の改善を試みようとする。こうした傾向の消費者は、外食時の食品摂取行動に対する関与度が低い場合に比して、高い場合の方が、すなわち、提供量固定方式に比して、食べ放題方式のレストランの方が、消費者は食品摂取量を自分で管理するため、不健康な食事を選択する際に、自分の失敗を能力などの内的要因に帰属させる。そして、そうすることによって、食べすぎの責任を、提供者であるレストランではなく自身に責任を負わせるであろう。それゆえ、こうした傾向の消費者は、前者より後者において、食べすぎが生じると考えられる。以上の議論より、次の仮説を提唱する。

仮説 1 自己奉仕的帰属傾向の消費者は、食べ放題方式に比して、提供料固定方式のレストランの方が不健康的な食事を選択する。

仮説 2 自己卑下的帰属傾向の消費者は、提供料固定方式に比して、食べ放題方式のレストランの方が不健康的な食事を選択する。

## 第 4 章 実験方法

### 4-1. 実験の概要

前章において提唱した仮説の経験的妥当性を吟味するために、消費者実験を実施してデータを収集した。まず、村本・山口 (2003) において採用されていた、自身の成功体験・失敗体験を家族または友人に話す場面を想定したシナリオを、被験者に読ませた。その上で、被験者の成功時・失敗時の帰属プロセスに関す

る質問項目に回答するように求めた。被験者の成功時・失敗時の帰属プロセスを実験した質問に対する回答に基づいて、自己奉仕的帰属傾向・自己卑下的帰属傾向を示さなかった被験者の回答は、分析に用いるデータから除外した。その結果、被験者は、17～37歳の男性64名（40%）および19～70歳の女性96名（60%）となった。

次に、被験者を、提供量固定方式のレストランに行く想定するグループと、食べ放題方式のレストランに行く想定するグループの2種類に分類し、それぞれに、Hagen, *et al.* (2017) において採用されていた、不健康な食事を選択する場面を想定させるためのシナリオを読ませた。その上で、「食事量」に関する質問に回答するように求めた。

不健康な食事を選択する場面における実験財として、唐揚げを採用した。唐揚げを採用した理由としては、レストランにおいて唐揚げを調理する際に用いられる油脂は、酸化することによって、発がん性物質が生成されるためである (Butler, Montague, Koh, Wang, Yu, and Yuan, 2013)。「食事量」に関する質問については、Hagen, *et al.*の質問項目を援用し、本論に合わせて再設定した。具体的には、食べ放題方式に対しては、「あなたは、トンぐでお皿に、揚げたての唐揚げを何個のせますか」という質問項目を設定し、提供量固定方式に対しては、「あなたは、従業員に揚げたての唐揚げを何個注文しますか」という質問項目を設定した。その上で、Hagen, *et al.*において採用されていた、皿の上に唐揚げをのせた「1:1個」から「10:10個」の10種類の写真の中から1つを選択させた。これらの写真については、図表1に示されるとおりである。

図表1 実験に使用した写真



#### 4-2. 測定尺度

「自己卑下的帰属」を測定するに際しては、「自己卑下的帰属」に関する既存研究である村本・山口 (1997) の尺度を採用した。一方、「自己奉仕的帰属」を測定するに際しては、村本・山口 (1997) の尺度を、Miller and Ross (1975) の主張する「自己奉仕的帰属」の尺度になるように修正して用いた。なお、実験に採用された尺度法は、「自己卑下的帰属」および「自己奉仕的帰属」については、7点リカート尺度（「1:全くそう思わない」～「7:非常にそう思う」）までのうち、1つの段階を選択するように依頼した。

各構成概念に関して、採用された測定尺度の信頼性を判断するための指標であるクロンバックの $\alpha$ 係数および合成信頼性 (SCR) と、妥当性を判断するための指標である平均分散抽出度 (AVE) を算出した。各構成概念のクロンバックの $\alpha$ 係数は、全て0.903以上の値であり、Nunnally (1978) が推奨する0.70という基準値を上回った。また、SCRおよびAVEは、全て0.904および0.543以上の値であり、Bagozzi and Yi (1988) が推奨する0.60および0.50という基準値を上回った。以上より、各構成概念の測定尺度は、高い信頼性および妥当性を有していると考えられるであろう。これらの分析結果は、図表2に示されるとお

りである。なお、分析に際しては、各構成概念に対する測定尺度の平均値をそれぞれ用いた。

図表 2 本実験の構成概念と測定尺度

構成概念	測定尺度 (因子負荷量)	$\alpha$ 係数	SCR	AVE
自己卑下的 帰属	$X_1$ : 謙遜して控え目に成功体験を話す。(0.80)	0.91	0.91	0.57
	$X_2$ : 「成功したのは、課題が簡単であったからである。」と話す。(0.57)			
	$X_3$ : 「成功したのは、運が良かったからである。」と話す。(0.75)			
	$X_4$ : 「成功したのは、周囲に助けられたからである。」と話す。(0.83)			
	$X_5$ : 自己批判的に自身の欠点・短所・問題を話す。(0.67)			
	$X_6$ : 「失敗したのは、自分が努力していなかったからである。」と話す。(0.87)			
	$X_7$ : 「失敗したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。(0.75)			
	$X_8$ : 「失敗したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。(0.73)			
自己奉仕的 帰属	$X_9$ : 謙遜せず、成功したことに対して、ありのままの喜びを示す。(0.67)	0.90	0.90	0.54
	$X_{10}$ : 「成功したのは、自分が努力したからである。」と話す。(0.80)			
	$X_{11}$ : 「成功したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていたからである。」と話す。(0.78)			
	$X_{12}$ : 「成功したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていたからである。」と話す。(0.68)			
	$X_{13}$ : 自己批判せず、運や、環境の悪さについて話す。(0.64)			
	$X_{14}$ : 「失敗したのは、課題が難しかったからである。」と話す。(0.70)			
	$X_{15}$ : 「失敗したのは、運が悪かったからである。」と話す。(0.77)			
	$X_{16}$ : 「失敗したのは、周囲との関係が悪かったからである。」と話す。(0.83)			

#### 4-3. マニピュレーションチェック

実験に採用された不健康な食事を選択する場面に関するシナリオが、調査票の意図どおりに実験参加者に正しく知覚されているかどうかを確認するために、マニピュレーションチェックを行った。具体的には、実験参加者に対して、「サラダは、栄養価が高く、健康的な食べ物である」および「唐揚げは、栄養価が高く、健康的な食べ物である」という食事の健康さに関する質問項目に回答するように依頼した。なお、マニピュレーションチェックにおいて採用された尺度法は、7点リカート尺度(「1: 全くそう思わない」～「7: 非常にそう思う」)であった。

分析の結果、食事の健康さに関して、サラダは栄養価が高く、健康的な食べ物であると実験参加者が思う程度( $M=5.956$ )と、唐揚げは栄養価が高く、健康的な食べ物であると実験参加者が思う程度( $M=3.206$ )の間に、統計的有意差が認められた( $t=18.650, p<0.001$ )。それゆえ、本実験のために不健康な食事として

選定された唐揚げは、本論の意図どおりに、実験参加者に不健康な食事として正しく知覚されたと言いうるであろう。

## 第5章 分析結果

### 5-1. 仮説1に関する分析の結果

仮説1の経験的妥当性を吟味するために、自己奉仕的帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群 ( $N_k = 43$ ) と、食べ放題方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群 ( $N_k = 41$ ) の間の唐揚げの食事量の差異について、検定を行った。なお、事前に Shapiro-Wilk 検定を行ったところ、標本の正規性を疑う証拠は得られなかった ( $W_k = 0.957$ ,  $p = 0.111$ 、および  $W_t = 0.933$ ,  $p = 0.018$ )。そこで、検定に際しては、パラメトリック検定である  $t$  検定を行った。

図表3 仮説1に関する分析の結果

構成概念	提供量固定方式のレストランを利用する場合の平均値 (標準偏差)	食べ放題方式のレストランを利用する場合の平均値 (標準偏差)	$t$ 値
食事量	4.51 (2.09)	3.00 (1.28)	4.02**

ただし、\*\*は1%水準で有意。

検定の結果は、図表3に要約されるとおりであった。自己奉仕的帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群の唐揚げの食事量の平均値が、4.512 (標準偏差は、2.086) であったのに対して、自己奉仕的帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群の唐揚げの食事量の平均値は、3.000 (標準偏差は、1.284) であり、両者の間の差は1%水準で有意であった ( $t = 4.020$ ,  $p < 0.000$ )。

これらの結果より、仮説1は支持されたと言いうるであろう。すなわち、自己奉仕的帰属傾向の消費者は、食べ放題方式のレストランの場合に比して、提供料固定方式のレストランの場合の方が、不健康的な食事を選択するということが示唆されたと言いうるであろう。

### 5-2. 仮説2に関する分析の結果

仮説2の経験的妥当性を吟味するために、自己卑下的帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群 ( $N_k = 40$ ) と、食べ放題方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験

者群 ( $N_t = 36$ ) の間の唐揚げの食事量の差異について、検定を行った。なお、事前に Shapiro-Wilk 検定を行ったところ、標本の正規性を疑う証拠は得られなかった ( $W_k = 0.941$ ,  $p = 0.037$ , および  $W_t = 0.967$ ,  $p = 0.339$ )。そこで、検定に際しては、パラメトリック検定である  $t$  検定を行った。

図表 4 仮説 2 に関する分析の結果

構成概念	提供量固定方式のレストランを利用する場合の平均値 (標準偏差)	食べ放題方式のレストランを利用する場合の平均値 (標準偏差)	$t$ 値
食事量	3.55 (1.84)	5.17 (2.37)	-3.34**

ただし、\*\*は 1%水準で有意。

検定の結果は、図表 4 に要約されるとおりであった。自己卑下の帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群の唐揚げの食事量の平均値が、3.550 (標準偏差は、1.839) であったのに対して、自己卑下の帰属傾向の消費者の中で、提供量固定方式のレストランを利用し、不健康な食事を選択する、という内容が書かれた文章を読んだ被験者群の唐揚げの食事量の平均値は、5.167 (標準偏差は、2.373) であり、両者の間の差は 1%水準で有意であった ( $t = -3.340$ ,  $p < 0.001$ )。

これらの結果より、仮説 2 は支持されたと言いうるであろう。すなわち、自己卑下の帰属傾向の消費者は、提供料固定方式のレストランの場合に比して、食べ放題方式のレストランの場合の方が不健康的な食事を選択するということが示唆されたと言いうるであろう。

## 第 6 章 おわりに

### 6-1. 学術的含意

本論は、次のような学術的な含意を内包している。第 1 に、既存研究による主張の前提として重要な役割を担う自己奉仕的帰属の他に、自己卑下の帰属を考慮したことである。Hagen, *et al.* (2017) は、提供量固定方式のレストランにおいて食べすぎを引き起こすと主張する際に、消費者が自己奉仕的帰属を行うことを前提としていた。それに対して本論は、食べ放題方式のレストランも食べすぎを引き起こしうると主張するに際して、日本をはじめとしたアジアの文化においてみられる自己卑下の帰属を考慮した。

第 2 に、帰属プロセスにおける消費者間差異が外食時の食品摂取行動に及ぼす影響を研究したことである。本論は、消費者を自己奉仕的帰属傾向と自己卑下の帰属傾向の 2 種類に分類した上で、自己奉仕的帰属傾向の消費者が、食べ放題方式より提供量固定方式のレストランにおいて食べすぎののに対して、自己卑下の帰属傾向の消費者は、提供量固定方式より食べ放題方式のレストランにおいて食べすぎるということを見出した。以上のような取り組みを通じて、本論は、食べすぎに関する研究の進展に貢献することができたと言いうるであろう。

## 6-2. 実務的含意

本論から得られる知見には、次のような2点の実務的含意が内包されている。第1に、食品業界のマーケティングは、外食が食べすぎを引き起こすという課題に対して、外食時の提供方式に応じた消費者への訴求が必要である。本論の知見によると、自己奉仕的帰属傾向の消費者が、不健康な食事を選択する際に、食べすぎの責任を自身ではなくレストランに負わせるため、食べ放題方式より提供量固定方式のレストランにおいて食べすぎを引き起こすのに対して、自己卑下的帰属傾向の消費者は、不健康な食事を選択する際に、食べすぎの責任を自身に負わせるため、提供量固定方式より食べ放題方式において食べすぎを引き起こす。このことを前提とすれば、提供量固定方式のレストランの場合、食品業界のマーケティングは、自己卑下的帰属傾向の消費者に向けて広告を行うことによって、消費者の食べすぎを抑制すべきであろう。それに対して、食べ放題方式のレストランの場合、食品業界のマーケティングは、自己奉仕的帰属傾向の消費者に向けて広告を行うことによって、消費者の食べすぎを抑制すべきであろう。

第2に、食べすぎや肥満に対して警鐘を鳴らす公的機関は、異なる帰属プロセスを有する消費者に対して、異なる食事提供方式のレストランを利用するように促すことが必要である。本論の知見によると、自己奉仕的帰属傾向の消費者は、食べ放題方式のレストランの場合に比して、提供量固定方式のレストランの方が、不健康な食事を選択する可能性が大きい。それゆえ、公的機関は、自己奉仕的帰属傾向の消費者に対して、食べ放題方式のレストランを利用するように促すべきであろう。それに対して、本論の知見によると、自己卑下的帰属傾向の消費者は、提供量固定方式のレストランの場合に比して、食べ放題方式のレストランの方が、不健康な食事を選択する可能性が大きい。それゆえ、公的機関は、自己卑下的帰属傾向の消費者に対して、食べ放題方式のレストランを利用するように促すべきであろう。

## 6-3. 本論の限界

本論は、次のような2点の限界を抱えている。第1に、不健康な食事を選択する場面における実験財として、唐揚げのみを用いた。第4-3節において示されたように、唐揚げが不健康な食事として被験者に知覚された。しかしながら、被験者には、唐揚げを不健康な食事として知覚する被験者だけでなく、鶏肉に多くのたんぱく質が含まれているため、唐揚げを健康な食事として知覚する被験者も存在した。不健康な食事を選択する場面における実験財として、唐揚げの以外にも、フライドポテト、ピザ、あるいはケーキなどが挙げられる。それゆえ、今後の研究においては、様々な不健康な食事を対象にした実験を行うことが望まれよう。

第2に、本論は、食事量を測定する際、時間および予算の制約上、被験者に不健康な食事を選択する場面を想定してもらって解答することに留まり、Hagen, *et al.* (2017) において用いられていた、被験者に食事を摂取させる実験方法を採用することができなかった。それゆえ、今後の研究は、本論における仮説の外部妥当性を吟味するために、実際に被験者にレストランで食事を摂取させる実験を行うことが望まれよう。

#### 6-4. 今後の課題

本論は、また、以下の課題を今後の研究に残している。本論は、既存研究に準じて、外食のレストランの提供方式のみに着目していたが、異なる提供方式を持つ食事として、外食以外に、お惣菜といった調理済み食品をはじめとする「中食」や、家庭料理をはじめとする「内食」も挙げられるであろう。例えば、中食の提供方式において、パックに包装された状態で提供される場合もあれば、量り売りで提供される場合もあるだろう。また、内食の提供方式においても、一人前の食事を提供される場合もあれば、大皿や鍋で提供される場合もあるだろう。このように、中食や内食の提供方式においても、本論の知見が当てはまるかもしれない。しかしながら、内食を提供する消費者のなかには、素材を用いて料理を作る消費者もいれば、家庭料理に中食を用いて料理を作らない消費者もいるであろう。消費者の家庭内での料理経験の差異を考慮した上で、異なる提供方式が食べすぎに及ぼす影響を研究した際には、本論とは異なる知見が得られるかもしれない。以上のことを検討するために、中食や内食を対象とした研究を展開するのは、興味深い今後の課題であろう。

(記) 本論の執筆に際して、御助力くださった全ての方々に対して、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。とりわけ、慶應義塾大学商学部小野晃典先生には、お忙しい中、ご厚情とご指導を賜りました。小野先生に何度も論文執筆のご指導していただいたおかげで、無事に、論文を完成させることができました。ありがとうございました。また、大学院生の方々や第15期生にも御助力頂きました。慶應義塾大学大学院博士課程2年生で小野晃典研究会第10期OBの石井隆太さんには、実験に際して、的確なアドバイスを頂戴しました。慶應義塾大学大学院修士課程2年生で小野晃典研究会第13期OBの清水亮輔さんには、既存研究レビューに関しまして、何度も添削していただき、多くのアドバイスを頂戴しました。また、第15期生の同期生たちと共に、夏合宿中に、互いに添削しあったことはかけがえのない思い出です。多くのアドバイスを頂き、本当にありがとう。最後に、本論の執筆活動に関わってくださった全ての方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

#### 参考文献

- Bagozzi, Richard P. and Youjae Yi (1988), "On the Evaluation of Structural Equation Models," *Journal of the Academy of Marketing Science*, Vol. 16, No. 1, pp. 74-94.
- Bradley, Gifford W. (1978), "Self-Serving Biases in the Attribution Process: A Reexamination of the Fact or Fiction Question," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 36, No. 1, pp. 56-71.
- Butler, Lesley M., Julia A. Montague, Woon-Puay Koh, Renwei Wang, Mimi C. Yu, and Jian-Min Yuan (2013), "Fried Meat Intake Is a Risk Factor for Lung Adenocarcinoma in a Prospective Cohort of Chinese Men and Women in Singapore," *Carcinogenesis*, Vol. 34, No. 8, pp. 1794-1799.

- Chandon, Pierre and Nailya Ordabayeva (2009), "Supersize in One Dimension, Downsize in Three Dimensions: Effects of Spatial Dimensionality on Size Perceptions and Preferences," *Journal of Marketing Research*, Vol. 46, No. 6, pp. 739-753.
- Chernev, Alexander (2011), "The Dieter's Paradox," *Journal of Consumer Psychology*, Vol. 21, No. 2, pp. 178-183.
- Guthrie, Joanne F., Biing-Hwan Lin, and Elizabeth Frazão (2002), "Role of Food Prepared Away from Home in the American Diet 1977-78 Versus 1994-96: Changes and Consequences," *Journal of Nutrition Education and Behavior*, Vol. 34, No. 3, pp. 140-150.
- Hagen, Linda, Aradhna Krishna, and Brent McFerran (2017), "Rejecting Responsibility: Low Physical Involvement in Obtaining Food Promotes Unhealthy Eating," *Journal of Marketing Research*, Vol. 54, No. 4, pp. 589-604.
- Heider, Fritz (1958), *The Psychology of Interpersonal Relations*, New York, NY: John Wiley.
- 北山 忍・高木浩人・松本寿弥 (1995), 「成功と失敗の帰因: 日本的自己の文化心理学 (特集: 達成動機)」, 『心理学評論』(京都大学), 第 38 卷, 第 2 号, pp.247-280.
- Miller, Dale T. and Michael Ross (1975), "Self-Serving Biases in the Attribution of Causality: Fact or Fiction?" *Psychological Bulletin*, Vol. 82, No. 2, pp. 213-225
- McFerran, Brent, Darren W. Dahl, Gavan J. Fitzsimons, and Andrea C. Morales (2010), "Might an Overweight Waitress Make You Eat More? How the Body Type of Others Is Sufficient to Alter Our Food Consumption," *Journal of Consumer Psychology*, Vol. 20, No. 2, pp. 146-151.
- Markus, Hazel R. and Shinobu Kitayama (1991), "Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation," *Psychological Review*, Vol. 98, No. 2, pp. 224-253.
- 村本由紀子・山口 勸 (1997), 「もうひとつの self-serving bias: 日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について」, 『実験社会心理学研究』(日本グループ・ダイナミクス学会), 第 37 卷, 第 1 号, pp. 65-75.
- ・—— (2003), 「『自己卑下』が消えるとき——内集団の関係性に応じた個人と集団の成功の語り方——」, 『心理学研究』(日本心理学会), 第 74 卷, 第 3 号, pp. 253-262.
- Nunnally, Jum (1978), *Psychometric Methods*, New York, NY: McGraw-Hill Education.
- Zlatevska, Natalina, Chris Dubelaar, and Stephen S. Holden (2014), "Sizing Up the Effect of Portion Size on Consumption: A Meta-Analytic Review," *Journal of Marketing*, Vol. 78, No. 3, pp. 140-154.

## 参考資料

デニーズ HP, <https://www.dennys.jp/> (最終アクセス 2018年7月16日).

農林水産省 HP, <http://www.maff.go.jp/> (最終アクセス 2018年7月16日).

しゃぶしゃぶ温野菜 HP, <http://www.onyasai.com/> (最終アクセス 2018年7月16日).

United States Department of Agriculture Economic Research Service HP, <https://www.ers.usda.gov/>

(最終アクセス 2018年7月16日).

## 補録 1 調査票 A

## 調査票 A

## 食べすぎに対する消費者意識調査

私は現在、卒業論文を執筆中であり、その論文に用いる消費者データを必要としています。今回ご回答頂いた内容は統計的な方法により処理致しますので、個人情報外部に漏洩することは絶対にございません。

ご多忙のところ大変恐縮ではございますが、上記の旨をご理解頂きますと、本調査にご協力お願い申し上げます。

慶應義塾大学商学部 小野晃典研究会  
第 15 期 穂苺 華子

【0】 あなたの年齢と性別を教えてください。

歳	男 ・ 女
---	-------

【1】 以下の文章を読んだ上で、あなた自身について質問にお答えください。

あなたが、何かで大きな成功を取めたとします。例えば、大切な試験でも良い点を取ったり、重要な仕事をやり遂げて高く評価されたり、スポーツや習い事で賞をとったりしたとします。この成功について、いまからあなたの家族あるいは友人に話すということを想像してください。

次の 8 つの質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の 7 つのうち、**1 つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 ……全くそう思わない  
2 ……そう思わない  
3 ……ややそう思わない  
4 ……どちらでもない  
5 ……ややそう思う  
6 ……そう思う  
7 ……非常にそう思う

1. あなた自身についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
1-1	謙遜して控え目に成功体験を話す。							
1-2	謙遜せず、成功したことに対して、ありのままの喜びを示す。							
1-3	「成功したのは、自分が努力したからである。」と話す。							
1-4	「成功したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていたからである。」と話す。							
1-5	「成功したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていたからである。」と話す。							
1-6	「成功したのは、課題が簡単であったからである。」と話す。							
1-7	「成功したのは、運が良かったからである。」と話す。							
1-8	「成功したのは、周囲に助けられたからである。」と話す。							

次のページへお進みください。

【2】以下の文章を読んだ上で、あなた自身について質問にお答えください。

あなたが、何かで大きな失敗したとします。例えば、大切な試験で低い点を取ったり、仕事で悪い業績を出したり、大事なスポーツ大会やコンテストで賞をとれなかったとします。この失敗について、いまからあなたの家族あるいは友人に話すということを想像してください。

次の8つの質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の7つのうち、**1つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 2 3 4 5 6 7  
 ……全くそう思わない ……そう思わない ……ややそう思わない ……どちらでもない ……ややそう思う ……そう思う ……非常にそう思う

1. あなた自身についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
2-1	自己批判的に自身の欠点・短所・問題を話す。							
2-2	自己批判せず、運や、環境の悪さについて話す。							
2-3	「失敗したのは、自分が努力していなかったからである。」と話す。							
2-4	「失敗したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。							
2-5	「失敗したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。							
2-6	「失敗したのは、課題が難しかったからである。」と話す。							
2-7	「失敗したのは、運が悪かったからである。」と話す。							
2-8	「失敗したのは、周囲との関係が悪かったからである。」と話す。							

【3】食べすぎについて、以下の質問にお答えください。

【3-A】

以下の文章を読んだ上で、質問にお答えください。

あなたは、**食べ放題のレストラン**に来ました。あなたは、食べる時に、ビュッフェ台まで歩き、どんな食事が提供されているかを確認し、サラダもありましたが、あなたは**揚げたての唐揚げ**を食べることに決めました。そして、あなたは、唐揚げをトングで掴み、お皿の上のせようとしています。

※唐揚げを食べすぎると、血中悪玉コレステロールが増加します。そして、血中ホモシステニン値も上がり、動脈硬化をはじめとする心血管疾患のリスクを高めます。

また、唐揚げを揚げる使用される油脂は、光や酸素、加熱等で酸化し、劣化します。その際にヘテロサイクリックアミン、アクロレイン、多環芳香族炭化水素 (PAH)、アクリルアミドといったタバコにも含まれる発がん性物質が生成されます。

次の質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の7つのうち、**1つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 2 3 4 5 6 7  
 ……全くそう思わない ……そう思わない ……ややそう思わない ……どちらでもない ……ややそう思う ……そう思う ……非常にそう思う

1. 食の健康についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
3-1	サラダは栄養価が高く、健康的な食べ物である							
3-2	唐揚げは栄養価が高く、健康的な食べ物である							

次のページへお進みください。

次の質問について、「1個：1」から「10個：10」の10つのうち、**1つの数字を選んで**○で囲んでください。

2. あなたは、トンゴでお皿に、揚げたての唐揚げを何個のせますか？



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

## 調査票 B

### 食べすぎに対する消費者意識調査

私は現在、卒業論文を執筆中であり、その論文に用いる消費者データを必要としています。今回ご回答頂いた内容は統計的な方法により処理致しますので、個人情報外部に漏洩することは絶対にございませぬ。

ご多忙のところ大変恐縮ではございますが、上記の旨をご理解頂きますと、本調査にご協力お願い申し上げます。

慶應義塾大学商学部 小野晃典研究会  
第 15 期 穂苺 華子

【0】 あなたの年齢と性別を教えてください。

歳	男 ・ 女
---	-------

【1】 以下の文章を読んだ上で、あなた自身について質問にお答えください。

あなたが、何かで大きな成功を取めたとします。例えば、大切な試験でも良い点を取ったり、重要な仕事をやり遂げて高く評価されたり、スポーツや習い事で賞をとったりしたとします。この成功について、いまからあなたの家族あるいは友人に話すということを想像してください。

次の 8 つの質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の 7 つのうち、**1 つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 …… 全くそう思わない  
2 …… そう思わない  
3 …… ややそう思わない  
4 …… どちらでもない  
5 …… ややそう思う  
6 …… そう思う  
7 …… 非常にそう思う

1. あなた自身についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
1-1	謙遜して控え目に成功体験を話す。							
1-2	謙遜せず、成功したことに対して、ありのままの喜びを示す。							
1-3	「成功したのは、自分が努力したからである。」と話す。							
1-4	「成功したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていたからである。」と話す。							
1-5	「成功したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていたからである。」と話す。							
1-6	「成功したのは、課題が簡単であったからである。」と話す。							
1-7	「成功したのは、運が良かったからである。」と話す。							
1-8	「成功したのは、周囲に助けられたからである。」と話す。							

次のページへお進みください。

【2】以下の文章を読んだ上で、あなた自身について質問にお答えください。

あなたが、何かで大きな失敗したとします。例えば、大切な試験で低い点を取ったり、仕事で悪い業績を出したり、大事なスポーツ大会やコンテストで賞をとれなかったとします。この失敗について、いまからあなたの家族あるいは友人に話すということを想像してください。

次の8つの質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の7つのうち、**1つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 2 3 4 5 6 7  
 ……全くそう思わない ……そう思わない ……ややそう思わない ……どちらでもない ……ややそう思う ……そう思う ……非常にそう思う

1. あなた自身についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
2-1	自己批判的に自身の欠点・短所・問題を話す。							
2-2	自己批判せず、運や、環境の悪さについて話す。							
2-3	「失敗したのは、自分が努力していなかったからである。」と話す。							
2-4	「失敗したのは、自分に社会的に望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。							
2-5	「失敗したのは、自分に努力家という望ましい属性を持っていなかったからである。」と話す。							
2-6	「失敗したのは、課題が難しかったからである。」と話す。							
2-7	「失敗したのは、運が悪かったからである。」と話す。							
2-8	「失敗したのは、周囲との関係が悪かったからである。」と話す。							

【3】食べすぎについて、以下の質問にお答えください。

【3-B】

以下の文章を読んだ上で、質問にお答えください。

あなたは、レストランに来ました。そのレストランでは、**従業員があなたに食事を提供します。**あなたは、レストランのメニューを見て、どんな食事が提供されているかを確認し、サラダもありましたが、あなたは、**お店の自慢である唐揚げを食べることに決めました。**そして、**あなたは、唐揚げをレストランの従業員に注文しようとしています。**

※唐揚げを食べすぎると、血中悪玉コレステロールが増加します。そして、血中ホモシステニン値も上がり、動脈硬化をはじめとする心血管疾患のリスクを高めます。

また、唐揚げを揚げる使用される油脂は、光や酸素、加熱等で酸化し、劣化します。その際にヘテロサイクリックアミン、アクロレイン、多環芳香族炭化水素（PAH）、アクリルアミドといったタバコにも含まれる発がん性物質が生成されます。

次の質問について、「全くそう思わない：1」から「非常にそう思う：7」の7つのうち、**1つの数字を選んで**○で囲んでください。

1 2 3 4 5 6 7  
 ……全くそう思わない ……そう思わない ……ややそう思わない ……どちらでもない ……ややそう思う ……そう思う ……非常にそう思う

1. 食の健康についてお伺いいたします。		1	2	3	4	5	6	7
3-1	サラダは栄養価が高く、健康的な食べ物である							
3-2	唐揚げは栄養価が高く、健康的な食べ物である							

次のページへお進みください。

次の質問について、「1個：1」から「10個：10」の10つのうち、  
1つの数字を選んで○で囲んでください。

2. あなたは、従業員に揚げたての唐揚げを何個注文しますか？

									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

